

## 横浜美術館の展覧会について

庄司尚子 | 学芸グループ チームリーダー、主任コーディネーター

### はじめに

美術作品の収集・保管・研究が美術館活動の大きな柱のひとつであるとするれば、美術作品の展示・公開もまた主要な柱である。それを実現するのが展覧会であり、美術館の中心的な事業である。横浜美術館は平成元（1989）年の開館以来、毎年多種多様な展覧会を開催してきた。市内の展示施設である横浜市民ギャラリーや横浜市民ギャラリーあざみ野のような、一般に対する貸し展示室をもたない横浜美術館では、展覧会はすべて横浜美術館が主催し、企画立案・実施において中心的な役割を担う。

横浜美術館の展覧会といえはまず、3階の展示室を会場とした企画展が思い浮かぶだろう。平成元（1989）年の開館記念展「メトロポリタン美術館名品展—フランス美術500年—」から、大規模改修工事にともなう休館前の最後の展覧会となった、令和3（2021）年の「トライアログ：横浜美術館・愛知県美術館・富山県美術館 20世紀西洋美術コレクション」展まで、32年の間に120本以上の企画展を開催してきた。一方で、横浜美術館では開館以来、企画展と同時開催で企画展と同規模の、時にはすべての展示室を使い収蔵品を展示・紹介する展覧会、いわゆる常設展／コレクション展を年間2、3本のペースで継続的に開催してきた。また、美術の広場に面した2階フロアに位置する小ぶりの展示スペース、アートギャラリーを主会場とした小規模な企画展には学芸員だけでなく、エドゥケーターや市民ボランティアとの協働による企画も含まれる。

本稿では、開館以来、横浜美術館館内のさまざまな場所で開催されてきた展覧会について概観する。

### 1. 企画展

企画展は、主に横浜美術館3階の展示室を会場として開催される有料の展覧会である。横浜美術館の単独主催の他、新聞社やテレビ局等のメディアや他美術館等との共催により企画開催される。主に展示室4、5、6（現・ギャラリー1、2、3）の3部屋とこれらの展示室に面したホワイエと呼ばれる空間を会場とするが、展覧会の規模や内容によっては展示室3（現・ギャラリー4）やグランドギャラリーの一部に拡張することもある。開館当初は会期2カ月ほどの企画展を年間4、5本のペースで開催してきたが、平成5（1993）年以降は年間4本の開催を基本とするようになった。横浜美術館が横浜トリエンナーレの主会場のひとつとなった平成23（2011）年以降は、トリエンナーレ実施年の企画展はトリエンナーレを含む3本となっている。来館者が横浜美術館に最初に足を運ぶきっかけのほとんどは、企画展の観覧であるだろう。いわば横浜美術館の顔ともいえる事業である。

横浜美術館の企画展は次のような基本方針により企画・実施される。

1. 国際港都横浜にふさわしい世界的な視野の企画。
2. 地域の人々が現代美術に親しみ、現代美術に対する理解を促すような企画。
3. 横浜と日本写真史の関係を重視し、国際的視野における現代までの写真を多角的にとらえた企画。
4. 近代日本の美術および横浜ゆかりの美術展。特に原三溪ゆかりの作家を重視しつつ、開港以来の洋画・日本画の流れを歴史的にとらえた企画。また、横浜出身または在住作家を中心に、横浜の美術史を多角的に紹介する企画。
5. 建築、工芸、デザインなど生活に密着した分野の企画。

(横浜美術館のウェブサイトより転載)

横浜美術館を訪れた多くの人にとっては、「開館1周年記念 西洋の名画展 スイス ビューレー・コレクション特別公開」(平成2(1990)年-同3(1991)年)、「ルーブル美術館200年展 名画でたどるコレクションの歩み」(平成5(1993)年)、「ゴッホ展 オランダ・クレラー=ミュラー美術館所蔵」(平成7(1995)年-同8(1996)年)、「開館10周年記念 セザンヌ展」(平成11(1999)年)、「レオナルド・ダ・ヴィンチ[白貂を抱く貴婦人] チャルトリスキ・コレクション展」(平成14(2002)年)等、開館から15年ほどの間に、大手メディアとの共催による西洋画の名品が並んだ展覧会が印象強く思い出されるかもしれない。平成18(2006)年の指定管理者制度導入による事業予算削減や、国立新美術館等、首都圏に横浜美術館よりも広い企画展スペースを有する美術館が開館したことにより、このようなタイプの展覧会の数は減ったが、それ以降も「ドガ展」(平成22(2010)年)、「メアリー・カサット展」(平成28(2016)年)、「横浜美術館開館30周年記念 オランジュリー美術館コレクション ルノワールとパリに恋した12人の画家たち」展(令和元(2019)年-同2(2020)年)と、休館前まで継続的に開催した。

一方で、早くから現代美術の動向を捉えた企画も行っている。平成6(1994)年に開催した「戦後日本の前衛美術」展は、海外からゲスト・キュレーターを迎え、全展示室を使い、戦後50年の日本の現代美術の動向を美術、映画、舞踏、書、陶芸等さまざまなジャンルを横断しながら概観した企画で、展覧会方針の1および2に合致するものだろう。本展はその後、グッゲンハイム美術館ソーホー(ニューヨーク、アメリカ)、サンフランシスコ近代美術館(アメリカ)に巡回している。また、戦後日本の現代美術を代表する作家のひとり、斎藤義重をはじめ(「斎藤義重による斎藤義重展 時空の木」、平成5(1993)年)、もの派の重要な作家である菅木志雄、李禹煥による個展をそれぞれ開催している(「菅木志雄 スタンス」展、平成11(1999)年。「李禹煥 余白の芸術展」、平成17(2005)年)。

1990年代から2000年代初頭にかけては、ロバート・フランク、ルイズ・ブルジョワ、ジャン=マルク・ピュスタモントラ、海外の現代美術の大御所による大規模個展を開催。日本人作家については、森村泰昌や奈良美智の国内公立美術館初の個展をはじめとして、金氏徹平、東芋、高嶺格、松井冬子、石田尚志ら、現在も第一線で活躍する作家たちにいち早く着目し、グループ展、ついで個展でとりあげている。平成27(2015)年の「蔡國強展: 婦去来」では作家の蔡が来日し、火気厳禁の美術館の館内で火薬を用いて新作を制作する等、話題を呼んだ。

ガラス彫刻を制作する海外作家を招聘し、展示やワークショップを実施した「拡張するガラス 美の表現者たち」展(平成7(1995)年)や“編む”という技法を用いる国内外の現代作家たちの仕事を展覧した「開館10周年記念 世界を編む展」(平成11(1999)年)は、工芸に分類される素材や技法による表現を現代美術の視点でとらえなおした企画であった。平成19(1997)年から開始した「現代の写真」シリーズは、写真・映像をメディアとして用いる国内外の作家たちに着目した横浜美術館の独自企画で、同26(2004)年まで計3回開催された。

収蔵作家や収蔵品を中心に据えた展覧会もまた、企画展の主軸を担っている。立体作品を6点収蔵しているイサム・ノグチについては平成18(2006)年と同31(2019)年の2度、展覧会を開催している。油彩、版画、素描等2000点以上を収蔵する長谷川潔については、平成3(1991)年、同18(2006)年および同23(2011)年の3回個展を開催している。「小島烏水 版画コレクション展 山と文学、そして美術」展(平成19(2007)年)は、横浜ゆかりの登山家・作家であり、版画の

収集家・研究者であった小島烏水が旧蔵し、のちに横浜美術館が収蔵した浮世絵や西洋版画のコレクションをはじめてまとめて紹介する機会となった。「シュルレアリスムと美術」展（平成19（2007）年）や「マックス・エルンストーフィギュア×スケープ」展（平成24（2012）年）は、国内公立美術館との共同企画で、当館が収蔵するシュルレアリスム作品に焦点をあてた展覧会である。「アジアへの眼 外国人の浮世絵師たち」展（平成8（1996）年）や「ポール・ジャクレー展 虹色の夢をつむいだフランス人浮世絵師」（平成15（2003）年）では東西の文化交流という視点から、収蔵作家であるヘレン・ハイド、モーティマー・メンパス、ポール・ジャクレーら、日本の木版画技法に惹かれ来日、制作した海外の作家たちをとりあげた。

日本画では「鏑木清方展」（平成2（1990）年）以降、横山大観や下村観山、今村紫紅、安田靉彦ら、横浜の実業家であり大コレクターであった原三溪の庇護をうけた日本画家たちの展覧会を開催している。横浜ゆかりの作家としては他にも、森田曠平、片岡球子、國領経郎、木下孝則、中島清之等、市内に拠点を置き活動した画家たちの仕事を個展形式で紹介してきた。

開港都市・横浜の歴史をひもときながら、海外の美術表現の受容の様相を考察した「幕末・明治の横浜展 新しい視覚と表現」（平成12（2000）年）や、「横浜開港150周年記念・横浜美術館開館20周年記念 大・開港展—徳川将軍家と幕末明治の美術—」（平成21（2009）年）も、横浜の美術館ならではの企画といえるだろう。

## 2. 常設展／コレクション展

横浜美術館の「常設展／コレクション展」は、横浜美術館の収蔵品を展示紹介する有料の展覧会である。3階の7部屋ある展示室のうち、主に正面から向かって左側に位置する展示室1、2、3（現・ギャラリー4、5、6）と写真展示室（現・ギャラリー7）およびグランドギャラリーの階段状の展示スペース（アートプラザ）を会場としている。開館当初より、横浜美術館の主たる展覧会のひとつとして年2、3回展示替えをしながら継続的に開催されてきた。

日本画、油彩画、彫刻、水彩・素描、版画、写真・映像、工芸といった幅広い分野にわたる横浜美術館の収蔵品は、大きさも形状もさまざまである。コレクション展の担当となった学芸員が展示室ごと、あるいはエリアごとに小テーマを設定し、収蔵品のなかから作品を選び展示を構成していく。当館の収蔵品のなかでも人気の高い、シュルレアリスムの作家たちによる油彩画を年間通して展示する等、市民の希望に応えた展示も実施してきたが、多くは担当学芸員の関心や研究に沿った内容となっており、作品解説や展示構成等に学芸員の個性が垣間見える。平成26（2014）年以降はコレクション展の方針を変更し、会期ごとに統一テーマを定め、ひとつの企画展として構成するようになった。そのなかから、のちに「王様の美術館 フランス近代美術とシュルレアリスムの精華」展（高知県立美術館、平成30（2018）年）や「昭和の肖像 写真でたどる『昭和』の人と歴史」展（アーツ前橋、平成30（2018）年）のように、他館の企画展として開催された展覧会も生まれている。

「横浜フランス月間」「CP+」「横浜開港150周年」といった横浜市が主導する文化イベントと連動させた関連展示も、コレクション展においてしばしば行われてきた。また関連事業として、学芸員によるギャラリートークの他、現存作家の作品展示の際には作家本人によるアーティストトークの実施等、収蔵品により親しむための事業を開催している。夏休み期間には、「夏休み子どもフェスタ」等、子どもたちに向けた教育普及事業をコレクション会期中に展開。平成28（2016）年には、教育プロジェクトチームのボランティアによる自主活動と連携し、収蔵品のなかから横浜が描かれた作品と描かれた場所を示す地図を並置した特集展示「描かれた横浜」をコレクション展展示室において実施した。他にもエドゥケーターによるギャラリートーク、ボランティアによる作品解説といった、収蔵品の展示を核としたさまざまな事業を展開している。

### 3. 横浜トリエンナーレ

横浜トリエンナーレは横浜市で3年に1度開催される現代アートの国際展である。平成13（2001）年に第1回展が開催され、以降、平成20（2008）年まで独立行政法人国際交流基金が主催団体として事務局機能を担い、横浜市内の別の場所を主会場として開催された。平成23（2011）年の第4回展に横浜市に運営主体が移行してからは横浜美術館が主会場のひとつとなった。それ以降は横浜美術館の企画展のひとつとして、定期的で開催されている。

横浜トリエンナーレでは、毎回外部から招聘されたアーティストック・ディレクターがテーマを設定し、展覧会の構成を考え作家の選定を行う。横浜美術館の学芸員とコーディネーターがキュレトリアルチームに参画し、外部のキュレーターやコーディネーターとともに主に横浜美術館会場の企画構成にあたる。平成26（2014）年以降は教育普及プログラムをエデュケーターが中心に担い、展示や運営を支えるボランティア（トリエンナーレ・サポーター）の育成や出品作家との協働による作品制作、関連事業を主体的に実施している。

館内はもちろん、美術の広場に面した屋外やグランドギャラリーでの大型作品の設置、通期にわたる作品の一部としてのパフォーマンスの実施等、通常の企画展を超える規模の展示が行われる。外部のディレクターやキュレーター、アーティストにより、その時々最新の表現がもたらされ、会場構成に関わる建築家により展示室を含む館内の空間が再解釈される。横浜トリエンナーレは、このように3年に1度、外部の視点が入ることで横浜美術館の展覧会の枠組みを広げる役割をも果たしている。

### 4. アートギャラリー事業（アートギャラリーを会場とした海外作家の小企画展シリーズ）

アートギャラリー（現・プロジェクトスペース）は美術の広場に面した横浜美術館の2階フロア、レクチャーホール入り口に向かう廊下に面し、正面に向かって右側に位置した展示室の名称である。アートギャラリー事業はこの展示室を主会場として、海外の同時代美術の動向を紹介することを目的とした、会期1か月ほどの入場無料の企画展シリーズである。平成3（1991）年より開始し、同17（2005）年まで計53回開催された。

アートギャラリー事業は展覧会ごとに実行委員会を結成し、作家、実行委員、美術館が連携して展覧会の実施・運営にあたった。初期よりアジアや中南米等、当時国内であまり紹介されることのなかった地域のアートに着目し、日本の美術大学に留学中の若い作家や、作品輸送や作家来日に大使館の協力を得ることができる作家による個展を中心に展覧会を開催した。平成11（1999）年以降は、近隣の非営利ギャラリーであるヨコハマポートサイドギャラリー（平成19（2007）年に閉廊）と共催し、2会場を使用した展覧会を年1回ほどのペースで実施した。同13（2001）年には、第1回横浜トリエンナーレの開催時期に合わせてインディペンデント・キュレーターを招聘し企画展を開催した。アーティスト・コレクティブや美術系NPO法人との協働にもいち早く取り組み、出品作家によるトークやライブイベント、シンポジウムの開催、また市民のアトリエ事業として出品作家のワークショップを実施する等、小規模ながらも作家や実行委員会の発案による多彩な事業を実施したが、平成17（2005）年度を最後に終了した。

### 5. アーティスト・イン・ミュージアム横浜（AIMY）

アーティスト・イン・ミュージアム横浜、通称AIMY（エイミイ）は、作家が一定期間、美術館館内で作品制作を行い、その過程の公開と成果発表を行う事業として平成17（2005）年から同21（2009）年までの5年間実施されたプログラムである。AIMYは平成16（2004）年に横浜市に創設された「開港150周年・創造都市事業」本部の基本方針である「アーティスト・



クリエイターの育成・支援と次世代育成」の実現を目的とする、同本部の「芸術創造活動推進事業補助金」を原資として実施された。

AIMYは、1990年代初頭に市民のアトリエが実施していた「公開制作」の流れをくむ事業として構想された。初年度の平成17(2005)年には同年開催の横浜トリエンナーレ2005出品作家を含む二人の作家がオルタナティブスペース(のちのアートギャラリー2、現・ギャラリー8)にしつらえた仮設のアトリエを拠点に横浜市内外に赴き、市民との協働による作品制作を行い、その成果を横浜美術館と横浜市民ギャラリーあざみ野で発表した。同18(2006)年から企画展と連動し、企画展の出品作家が館内で新作を制作し、その過程を公開する形式のプログラムを開始。翌年からは公募により滞在作家を招聘し、リサーチや作品制作を経て1カ月弱の展覧会の開催を行うプログラムを2カ年にわたり実施した。同20(2008)年からは、京浜急行電鉄本線の日ノ出町駅から黄金町駅にいたる高架下のスタジオを中心としたアートイベント「黄金町バザール」と協働。同イベントを主催する黄金町バザール実行委員会が管理するレジデンススペースにおける作家滞在与、横浜美術館および「黄金町バザール」での作品制作・成果発表を組み合わせたプログラムを実施した。

BankART1929や特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター等、横浜都心部の歴史的建造物等を拠点にアーティストの創造的活動を支援する「創造界限」の施設が定着し、レジデンスプログラムが恒常的に実施されるようになったこともあり、横浜美術館を制作場所としたレジデンスプログラムであるAIMYは平成21(2009)年度を最後に終了した。

## 6. New Artist Picks、創造活動支援事業

New Artist Picks、通称NAP(ナップ)は若手新進作家の創作発表活動支援を目的とした個展形式の展覧会シリーズとして、平成19(2007)年度より開始した入場無料の事業である。当初は学芸教育グループ(現・学芸グループおよび教育普及グループ)のエducーター(当時の補職名はコーディネーター)が複数名で担当し、同19(2007)年度に3名、同20(2008)年度は1名の作家の個展を開催。同21(2009)年度の休止を経て、主管を学芸グループに移し、学芸員が企画する新進作家紹介を目的とした「若手作家支援事業」と名称を変更して再開された。平成22(2010)年度、同24(2012)年度、同25(2013)年度の3回開催後、同26(2014)年度より名称をNew Artist Picksに戻し、その年の担当学芸員が初発表後10年以内の作家を対象として作家選定を行う形式とした。以降、令和元(2019)年度を除き令和2(2020)年度まで、アートギャラリー1とカフェ小倉山を主会場に毎年1回、1カ月ほどの会期で開催されている。大規模改修工事による休館期間中は、美術の広場に面した建築工事の仮囲いにデジタル出力した作品を掲出する「New Artist Picks: Wall Project」として開催している。

## 7. その他の展覧会

本書の「個別年表01 みる：展覧会事業」には、上記の事業以外の展覧会名が掲載されている。それらの多くは当館の教育普及部門、すなわち子どものアトリエ、市民のアトリエ、そして教育プロジェクトが企画、実施してきた。例えば、子どものアトリエは、平成元(1989)年の開館当初よりアートギャラリーを会場とし、凧という身近な玩具を起点とした企画展や海外の美術館における子どもを対象としたプログラムを紹介する展示等、独自の企画展を開催してきた。市民のアトリエは、現代美術の作家による「公開制作」プログラムの成果展示の他、ワークショップの受講生による作品展等を通常の講座のかたわら実施してきた。教育プロジェクトは、市民ボランティアとともに深めてきた所蔵作品についての研究成果をコレクション展の特集展示として展開。令和元(2019)年には「横浜美術館開館30周年記念/横浜開港160周年記念『絵でたどるペリー来航』」展としてアートギャラリー1(現・プロジェクトスペース)で開催している。

横浜開港150周年にあたる平成21(2009)年には、「イリス150周年 近代日本と共に歩み続ける或るドイツ商社の歴史展」、「柳宗理展」といった展覧会を、関連企業や企画会社と協働して学芸員が企画し、実施している。他にも「126 POLAROID—さよならからの出会い—」展(平成22(2010)年)、「旅する根付 高円宮妃殿下写真展と現代根付コレクション」展(平成30(2018)年)といった、通常の枠組みにはない単発の小規模展を開催してきた。美術情報センター(現・美術図書館)においては司書が主体となり既存の展示ケースや書棚において蔵書の特集展示を行う等、館内の各専門職による小規模な展示が各所で行われてきた。

## おわりに

横浜美術館は横浜市立の美術館として、横浜市の文化政策や市民のニーズに応えながら横浜美術館らしい展覧会のあり方を模索し、企画・実施してきた。今回の「個別年表01」を見ても、企画展や常設展/コレクション展を中心におびただしい数の展覧会を開催してきたことがわかる。

平成31/令和元(2019)年に開催した「横浜美術館開館30周年記念 Meet the Collection—アートと人と、美術館」展の会場内で、来場者に思い出の展覧会についてアンケートを募ったところ、企画展だけでなく、コレクション展や小企画展、AIMYのようなプログラムについてもまんべんなくコメントが寄せられた。家族や友人とともに海外の美術館の名品展や日本画の巨匠の展覧会に来場した思い出をつづる人や、コレクション展に展示されているお気に入りの収蔵作品について熱いコメントをよせる人、横浜トリエンナーレをはじめとする現代美術の展覧会こそを横浜らしいと捉え足を運ぶという人、ボランティアやサポーターとして実際に作品制作や運営に参加した思い出を語る人等、横浜美術館のバラエティーに富む展覧会ラインナップがさまざまな人々の関心を集めてきたことが実感できた。

大規模改修工事によって、横浜美術館の展示室は照明や内装が更新される。美術の広場に面した小規模な展示スペース(ギャラリー8、9)も整備され、より多彩で多様なプログラムの展開が可能となる。当館は開館35周年にあたる令和6(2024)年度にリニューアルオープンを予定している。コロナ禍を経て、厳しい経済状況のなか、「みなとみらい21」地区の中心に位置する文化施設として、これまで以上に集客が期待され、にぎわいの創出が期待されるだろう。これまで培ってきたノウハウを基盤としながら、人々の心に残るような展覧会企画を通して、新たな横浜美術館像を結んでいかれるとよいと思う。